

平成 22 年 6 月 15 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）  
研究期間：2008～2009  
課題番号：20820067  
研究課題名（和文）資源利用と民族共存に関する歴史・自然環境分析を用いたスワヒリ海村社会の比較研究  
研究課題名（英文）Geo-historical Classification based Comparative Study on Resource Use and Multi-ethnic Coexistence in the Swahili Maritime Society  
研究代表者  
中村 亮（NAKAMURA RYO）  
総合地球環境学研究所・研究部・プロジェクト研究員  
研究者番号：40508868

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、スワヒリ海村社会の資源利用と多民族共存に焦点をあてて、歴史・自然環境分析を用いて比較研究することで、スワヒリ海村社会全体の構造を解明することである。ケニアのラム諸島（ラム、マンダ、パテ）とタンザニアのキルワ島で比較研究を行った。ラム諸島とキルワ島はともに、初期スワヒリ交易都市であり、自然環境も類似している（マングローブとサンゴ礁の海）しかし、現在のキルワ島が人口 1000 人足らずの小海村である一方、交易や観光業で栄えるラム島の人口は 2 万人ちかくもあり、民族構成もキルワ島より複雑である。このようなラム島の多民族には、民族に応じた生業形態、生業空間、資源利用、居住空間の住み分けがみられた。今後、宗教（イスラームとキリスト教）、観光客など外部者の存在、経済・教育格差などの問題についても考慮し研究を精緻化する必要がある。

研究成果の概要（英文）：Focusing on the topics of resource use and multi-ethnic coexistence, the aim of this study is to clarify the structure of the Swahili maritime society by using the typological method of geo-historical classification from the cases of Lamu archipelago (Lamu, Manda, and Pate) in Kenya and Kilwa Island in Tanzania. Both Lamu archipelago and Kilwa Island are the former Swahili trading port and have similar maritime environments: inland sea covered with mangrove and open sea with fringing reef. However, while Kilwa Island is now a small seashore village with fewer than a thousand inhabitants, Lamu Island, well developed in trading and tourism, has about twenty thousand populations and its ethnic composition is more complicated than that of Kilwa Island. The multi-ethnics in Lamu Island coexist by separating their livelihood, occupational space, resource use, and residence place. Further studies on the issues of religion, tourism, and economic/educational disparities should be conducted to refine the research results.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,330,000	399,000	1,729,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,530,000	759,000	3,289,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学，海洋文化，資源利用，民族共存，比較文化，タンザニア：ケニア，キルワ島：ラム島：パテ島

### 1. 研究開始当初の背景

紀元前よりのアラブ・ペルシャ地域とのインド洋交易により，東アフリカ沿岸のスワヒリ海岸には国際交易都市群が形成された。それら交易都市の現在の姿が，イスラームを基調として，漁撈，農耕，近距離交易，製塩などの複合的な生業形態をもち，多民族が混住するスワヒリ海村である。

スワヒリ文化発祥の地であり，マングローブとサンゴ礁の海環境も豊かなスワヒリ海村の民族誌研究は，重要であるにも関わらずこれが希少であったが，2000年以降いくつかの研究があらわれた。タンザニアでは，ザンジバル島やキルワ島の海村研究をおこなうソルボンネ大学のBacuez（現イエメン・サナー大学）のものがある（Bacuez, Pascal 2001, *De Zanzibar A Kilwa*. Peeters.）。マダカスカル南西部の漁民ヴェズ社会を研究した飯田が2006年より，モザンビークのイブ島にて海村調査を開始している（飯田卓2008『海を生きる技術と知識の民族誌』世界思想社）。スーダンの紅海沿岸の牧畜民と沿岸生態系との関係についての縄田

の一連の研究も発表されだした（縄田浩志 2002「海岸植生に依存するラクダ牧畜：スーダン領紅海沿岸ベジャ族の放牧地に関する事例分析から」『アフリカ研究』60:105-120.など）。しかし，スワヒリ海村社会の全体像を明らかにするような研究はまだあらわれていない。

申請者は2000年より，かつて海洋イスラーム王国が存在したキルワ島で研究をおこなってきた。その結果キルワ島は，26民族混住という驚くべき多民族社会であり，そこでは居住空間，生業空間，資源利用の民族（バントゥ系民族とアラブ系民族）におうじた棲み分けにより多民族の共存が達成されていることが明らかになった。しかしこれまでの研究はあくまでキルワ島の海村構造であり，スワヒリ海村社会の構造は実際にはもっと多様である。スワヒリ海村社会の構造は，その他の海村社会との比較研究により解明されなくてはならない。

そこでまず，申請者はスワヒリ海村を歴史・自然環境分析（Geo-historical Analysis）の視点より，六つの型の海村に分類する。

- (1)アラブ・ペルシャ系民族の大半が退去した大陸沿岸に立地する海村
- (2)アラブ・ペルシャ系民族の大半が退去したラグーンに立地する海村
- (3)アラブ・ペルシャ系民族の大半が退去した沖合に立地する海村
- (4)アラブ・ペルシャ系民族が比較的残留している大陸沿岸に立地する海村
- (5)アラブ・ペルシャ系民族が比較的残留しているラグーンに立地する海村
- (6)アラブ・ペルシャ系民族が比較的残留している沖合に立地する海村

(2)分類の構造はキルワ島の事例より解明された。本研究では、残る五つの地域での比較研究を進めてスワヒリ海村社会全体の構造を類型的に解明する。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、スワヒリ海村の六類型のうち(5)類型のラム島を調査対象とし、キルワ島と比較研究することでその海村構造について解明することであった。

### (1)ラム島の生態海域

ラム島は大陸からわずかに隔たった河口域に立地し、大陸側にマングローブ内海、インド洋側にサンゴ礁をもつという自然環境的にキルワ島と類似した海村である。キルワ島の海環境は三つの生態海域に分かれた。それは 1)マングローブ内海、2)サンゴ礁をもつ外海、3)内海と外海の境界海域である。キルワ島の住民生活は三生態海域を基礎として展開されていた。果たしてラム島にもこのような生態海域におうじた住民生活が存在するのだろうか。

### (2)「マングローブ内海」をもつスワヒリ海村の構造

申請者はこれまで、キルワ島において

「マングローブ内海」が歴史的に居住空間、漁撈活動、地域社会形成および外敵からの防衛に貢献してきたことを明らかにした。そして初期のスワヒリ交易都市の大半が、マングローブ内海に立地していることより、マングローブ内海がスワヒリ交易都市成立の生態学的条件であったと考察した。ラム島もキルワ島もインド洋交易初期のスワヒリ交易都市である。しかしラム島は歴史環境的にキルワ島と異なる。アラブ・ペルシャ系民族に加えインド、ポルトガル系住民が居住しており、経済的にも発展しており、民族構成や宗教形態も複雑である。キルワ島では、三生態海域を基準として民族におうじた居住空間、生業空間、資源利用の棲み分けがおこなわれていた。それではラム島ではどうか。

類似の自然環境条件をもつラム諸島とキルワ島の間で、歴史環境が異なることにより海村構造にどのような違いが生じるのかについて比較研究をおこなうことで、「マングローブ内海」を基調としたスワヒリ海村構造の多様性が解明できるものと期待される。

### (3)スワヒリ海村の比較研究

キルワ島とラム諸島との比較研究を行う。加えて、申請者は平成 20 年度の笹川科学研究助成により、タンザニアのマフィア島で現地調査をおこなった。キルワ島、ラム島、マフィア島の三海村での比較研究により、スワヒリ海村の構造の全体像を探る。

## 3. 研究の方法

スワヒリ海村の六類型のうち、ラム諸島とキルワ島において平成 20 年と 21 年の二回にわたり現地調査をおこなった。

ラム島での調査では、申請者がこれまでおこなってきたキルワ島の事例をモデルケースとして、キルワ島との相違点または類似点を導き出すという研究方法を採用することにより研究計画遂行の効率性を高めた。したがって調査項目はキルワ島の事例をもとに事前に想定しておくが、それはあくまでも想定であって、ラム島での現地調査の過程で、調査項目は柔軟に変化させた。同時に、前提としてある「スワヒリ海村の六類型」についても、その分析の妥当性について随時考慮し、スワヒリ海村の類型そのものについての精度も上げた。

申請者は名古屋大学の嶋田義仁教授が代表をつとめる海外学術研究(平成18-20, 科研基盤 A「イスラーム圏アフリカにおける白色系民族と黒色系民族の紛争と共存の宗教人類学」)に研究協力者として参加している。嶋田教授は歴史・自然環境分析を用いてアフリカ大陸とユーラシア大陸の乾燥地文化を比較研究しており、申請者は研究方法について嶋田教授から適時助言を受けることができる研究体制にある。また総合地球環境学研究所では、縄田浩志准教授をプロジェクトリーダーとする「アラブ社会のなりわい生態系の研究」のプロジェクト研究員を務めている。このプロジェクトでは紅海沿岸域のマングローブ資源利用について研究する。その意味で申請者は、スワヒリ海村と紅海沿岸部のマングローブ環境を比較検討しながら研究を進めることができる学問的に非常に恵まれた研究環境にあるといえる。本研究は、嶋田教授と縄田准教授の研究プロジェクトからの学術的支援を受け発展してゆくとともに、スワヒリ海村社会の事例より、両研究プ

ロジェクトに貢献することができる。

#### 4. 研究成果

スタートアップの二年間に特に力を注いだことは、研究環境の整備(研究機材、文献購入、調査許可取得、研究協力体制の確立)と、ケニアのラム諸島(ラム・マンダ・パテ島)とタンザニアのキルワ島での比較研究を目的とした現地調査である。二年間の研究成果は、6の論文(英文4, 査読1)と10の学会発表(国際シンポ6)によって発表された。

調査許可を取得したことで、ラム諸島では各役所への訪問調査と、諸島に分散する全海村での現地調査を円滑に遂行することができた。その結果、ラム諸島における、全海村の基礎データの収集、文献収集、環境地図の作成、漁法・漁具・船の分類、民族構成、精霊信仰が明らかになった。ラム諸島もキルワ島と同様に、初期スワヒリ交易都市であり、大陸にほど近く立地してマングローブとサンゴ礁の海をもつ島である。しかし、現在のキルワ島が人口1000人足らずの小海村である一方、交易や観光業で栄えるラム島の人口は2万人ちかくもある。民族構成もキルワ島より複雑である。このようなラム島の多民族には、民族に応じた生業形態、生業空間、資源利用、居住空間の住み分けがみられた。ラム諸島の多民族共存を考える際にはさらに、宗教(イスラームとキリスト教)、観光客など外部者の存在、経済・教育格差などの問題があり、二年間の研究期間では十分にその全貌を解明できたとはいえない。今後の研究の継続を見据えて、ケニアの研究機関(ナイロビ大学アフリカ研究所、ナイロビ科学技術省、JSPSナイロビ研究連絡センター)との協力体制と、現地調査協力者との信頼関係を構

築することができたことも本研究の大きな成果である。

研究実績は以下のとおりである。

- (1)書籍, パソコン, 調査機材の購入による研究環境の整備
- (2)論文発表: 六本の論文を執筆し, スワヒリ海村のマングローブ資源利用とアラブ系・バントゥ系民族の多民族共存について「棲み分け」をキーワードに論じた
- (3)学会発表: 国際学会(6回)と国内学会(4回)において主にマングローブ資源資料と多民族共存について発表。
- (4)平成20年度現地調査: ケニア・ラム諸島での現地調査(2/28-3/28)
- (5)平成21年度現地調査: ケニア・ラム諸島とタンザニア・キルワ島の比較研究(8/25-9/25)。
- (6)現地研究機関との協力体制の確立: ナイロビ大学アフリカ研究所(IAS), ナイロビ科学技術省(NCST), タンザニア科学技術省(COSTECH) JSPSナイロビ研究連絡センターとの研究協力体制の確立に努めた。ラム島では現地調査協力者との信頼関係を構築することができた。
- (7)本研究のためにケニアでの3年間の調査許可を取得。タンザニアの調査許可は取得済み。本年度分の調査報告書を提出し, 今後のタンザニアでの現地調査に備えた。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計6件)

- ① NAKAMURA Ryo, 2010, “Direct and Environmental Uses of Mangrove Resources on Kilwa Island, Southern Swahili Coast, Tanzania”, in *Annals of Japan Association for Middle East Studies*. 査読有, 採録決定。
- ② NAKAMURA Ryo, 2009, “Seafood

Preservation and Economic Strategy in a Maritime Society: A Case Study of the Dried Fish Trade in Kilwa Kisiwani on the Southern Swahili Coast”, in *Comparative Perspectives on Moral Economy: Africa and Southeast Asia*. ed. by Kazuhiko Sugimura, Fukui Prefectural University, pp.195-209, 査読無。

- ③ NAKAMURA Ryo, 2008, “Local Mangrove Resource Use on Kilwa Island, Southern Swahili Coast”, ed. by Hiroshi Nawata, *A study of Human Subsistence Ecosystems with Mangrove in Drylands: To Prevent a New Outbreak of Environmental Problems*. Research Institute for Humanity and Nature, pp. 26-27 (in English and Arabic), 査読無。
- ④ NAKAMURA Ryo, 2008, *Maritime Environment and Life of the Former Islamic Kilwa Kingdom formed at Mangrove Inland Sea*. Progress report on previous research for Tanzania Commission for Science and Technology (COSTECH), 10p, 査読無。
- ⑤ 中村亮 2008 「ユネスコ世界遺産をめぐる二つの挿話」嶋田義仁編『伝統的知識と技術の再活性化によるアフリカの草の根的開発(Grass Root Development)と環境保護』, pp. 109-112, 査読無。
- ⑥ 中村亮 2008 「スワヒリ海村キルワ島のバントゥ系住民とアラブ系住民の居住空間の棲み分け」嶋田義仁編『イスラーム圏アフリカ論集 アフリカ・イスラーム圏における白色系民族と黒色系民族の紛争と共存の宗教人類学研究』, pp. 153-162, 査読無。

[学会発表] (計10件)

- ① 中村亮 2010 「インド洋西海域世界の比較研究：ケニア・ラム諸島の漁撈文化」『アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文化研究 第二回国際ワークショップ』, 1月23-24日, 名古屋大学.
- ② NAKAMURA Ryo, 2009, “Maritime Environments and Multi-ethnic Coexistence in Swahili Society: The Current Situation of the Former Islamic Kingdom, Kilwa Island, Southern Tanzania”, at AA Science Platform Program: *Religious Dynamics of Contemporary Africa concerning the Destruction of Traditional Life Mode and New Religious Movement*, Dec 13-15, Nagoya University, Aichi, Japan.
- ③ NAKAMURA Ryo, 2009, “Spirit (*jini*) and Magic (*uchawi*) Beliefs in Kilwa Island, Southern Swahili Coast, Tanzania” at AA Science Platform Program: *Religious Dynamics of Contemporary Africa concerning the Destruction of Traditional Life Mode and New Religious Movement*, Oct 10, Nagoya University, Aichi, Japan.
- ④ NAKAMURA Ryo, 2009, “Maritime Environments of the Swahili Coastal Civilizations”, at *The 16th International Congress of IUAES*, Jul 27-31, Yunnan University, Kunming, China.
- ⑤ NAKAMURA Ryo, 2009, “Ecological Basics in Kilwa Island, Southern Swahili Coast”, at *Afro-Eurasia Civilizations: The 1st International Workshop*, Jul 18-20, Nagoya University, Aichi, Japan.
- ⑥ 中村亮 2009 「スワヒリ海村キルワ島のマングローブ内海地域社会」(分科会発表)『日本文化人類学会第43回研究大会』, 5月30-31日, 国立民族学博物館／大阪国際交流センター.
- ⑦ 中村亮 2009 「スワヒリ海村の漁撈文化：タンザニア・キルワ島におけるバントゥ起源の内海漁撈とアラブ起源の外海漁撈」(ポスター発表)『日本アフリカ学会第46回学術大会』, 5月23-24日, 東京農業大学.
- ⑧ NAKAMURA Ryo, 2008, “On the Local Mangrove Resources Use of Kilwa Island in Southern Swahili Coast”, at *Ninth International Conference on Dryland Development*. IDDC, Nov 7-10, Alexandria, Egypt.
- ⑨ NAKAMURA Ryo, 2008, “Multi-ethnic Coexistence in Swahili Society: Two Fishing Cultures, Ethnicity, Multiple Ecological Sea Zones of Kilwa Island, Southern Swahili Coast”, at The 3<sup>rd</sup> RIHN International Symposium *The Futurability of Islands: Beyond Endemism and Vulnerability*, Oct 22-23, RIHN, Kyoto, Japan.
- ⑩ 中村亮 2008 「スワヒリ海岸キルワ島の海環境と住民生活：マングローブ資源利用を中心に」『日本アフリカ学会大45回学術大会』, 5月24-25日, 龍谷大学.

[その他]

ホームページ等

<http://archives.chikyu.ac.jp/archives/AnnualReport/Viewer.do?prkbn=R&jekbn=J&id=248>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中村 亮 (NAKAMURA RYO)

総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員

研究者番号：40508868